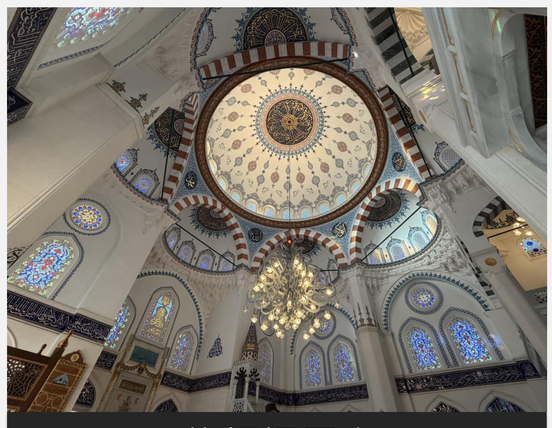
日本における「東京ジャーミイ」

佐野 巧武 、福原 洸太郎（岩倉高等学校）

1．はじめに

最近、イスラームが土葬問題や移民問題などで関心を集めている。日本でその中心的存在を担っているのが、東京ジャーミイである。この施設では、礼拝やハラールフードの販売、日本人向けのツアーなどが行われている。そのような東京ジャーミイの過去と現在の存在意義について研究した。



礼拝場屋内

2．東京ジャーミイができた経緯

1920年代　ロシア革命の宗教弾圧を逃れ、ムスリムのカザン州タタール人が東京を含む日本全国に避難

1930年　渋谷区富ヶ谷（代々木八幡駅周辺）に東京回教学校を開校

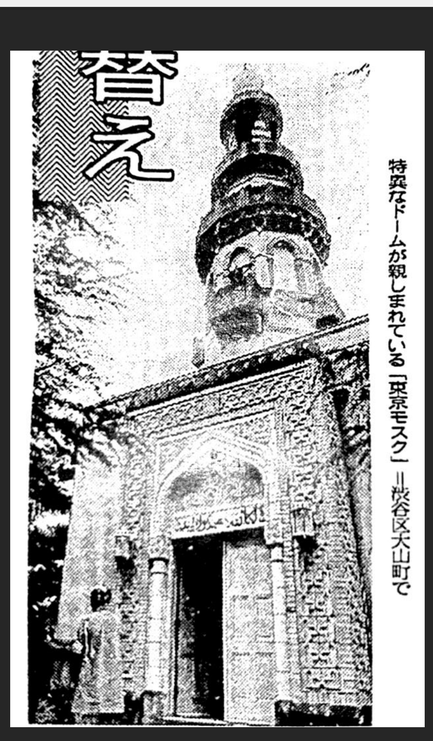
▶周辺にコミュニティを形成

1938年　代々木上原に「東京回教礼拝堂」を開く

1986年　壁への浸水による老朽化が原因で取り壊し

▶再建のためにトルコ政府が土地買収

2000年　2代目の新しい礼拝堂「東京ジャーミイ」が完成



東京回教礼拝堂
（朝日新聞より）

現在の東京ジャーミイ

3．東京回教礼拝堂の建設

日本の寄付で東京回教礼拝堂を建設し、献堂式には日本軍幹部も出席して大々的に宣伝された。

▶日中戦争や南進政策でムスリムを親日化しようとした

▶ソ連の非難材料を確保したかった？

4．礼拝堂の解体と施工

トルコ政府主導で再建が進められる

▶他国のムスリムたちが反発

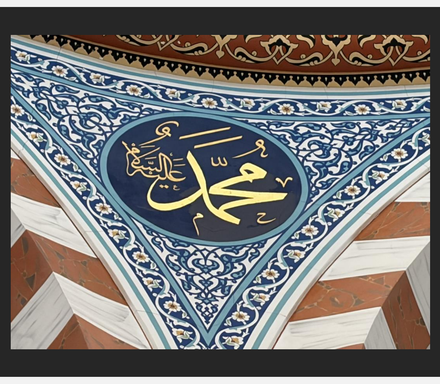
▶反発したムスリムたちの仮説礼拝所テントが切り裂かれる事件が発生

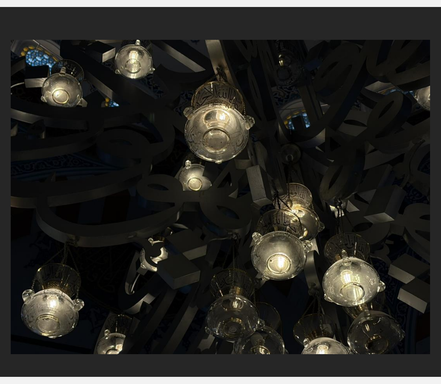
◎解体から施工までに期間がある

5．現在の役割

現在、訪日外国人の増加に伴い、イスラーム国家からの訪日客も増えている。休日は出稼ぎのインドネシア人が多く東京ジャーミイに訪れるという。他にも宗教や文化、言語関するイベントを実施している。

▶信仰と交流の場として、今も多くの人が訪れている





礼拝場の建物は細部まで装飾されている

6．考察

1920年にタタール人は遠いロシアから避難して以降、国際関係的な都合の良さを理由に、日本政府に保護され奇跡の連続で戦時中を代々木上原で生き抜いた。その後、代々木上原をコミュニティの拠り所として日本と共存した生活をしつつ、礼拝堂を通じて心の拠り所として支え合い、長年日本におけるイスラームの中心的役割を担った。このようなことから、今後は労働力不足解消や観光目的での来日の増加が予想されるムスリムの生活を支えるために、かつてタタール人が必要として築いた礼拝堂を、心の拠り所として残す義務があると考える。それと同時に、100年前にイスラーム文化が全くなかったこの国で、タタール人が1から作ったこのコミュニティを残すためにも、代々木上原にある「東京ジャーミイ」は今後も残すべきである。ムスリムのためだけでなく、外国人問題で揺れる日本の人々がイスラームについて知れる場所になればよいと私たちは考えた。

＜参考文献＞　坂本勉『日中戦争とイスラーム』（2008, 慶応義塾大学出版会）｜『東京ジャーミイ・ディヤーナト　トルコ文化センター』（東京ジャーミイ出版会）｜「『東京モスク』衣替え　サウジが11億寄付　設計を公募」朝日新聞（2026.2.8）https://xsearch.asahi.com/｜「モスクを覆った戦争の影　大阪大大学院・福田義昭講師に聞く」朝日新聞（2026.2.8）https://xsearch.asahi.com/｜「仮説礼拝所テント切り裂く　東京回教寺院」読売新聞（2026.2.8）https://yomidas.yomiuri.co.jp/｜「ムスリムをおもてなし　訪日ツアー客　急増　理解進まず　トラブル懸念」読売新聞（2026.2.8）https://yomidas.yomiuri.co.jp/